

すばらしきかな御蔵島

自由研究者 石田 健

20年余ぶりに御蔵島へ行ってきました。バードリサーチの佐藤 望さんが中心となって実施されている伊豆諸島の繁殖鳥類調査のためです。時を隔てて同じ場所を訪れると、自然や社会の変貌を目の当たりにして無常を実感するもので、御蔵島もそうでした。



御蔵島はイルカウォッチングが人気で宿がとりにくく、キャンプは禁止で、宿がとれないと下船させてもらえません。私たちは単独行動のできる調査許可をもらいましたが、一般の方は地元のネイチャーガイドがつかないと、里集落の外は歩けないという規制もあります。

調査のために、朝3時から島の中を歩けるだけ歩き回って、御蔵島の新たな魅力、壮大な景観やよく整備された歩道なども知りました。私たちの滞在中に台湾の国立公園スタッフもバンガローに滞在していて、素晴らしいと絶賛していました。

世界的に観光客が増えて、過密・過剰な利用が自然を損ねる弊害も目立ちます。混んでいては、本来の自然の静寂や醍醐味を感じられないだろうとも懸念されます。1990年にニュージーランド南島のクライストチャーチで開催された国際鳥学会議に参加したときに、会議前に北島のオークランドから1500km余りをドライブし、事前予約してウェリントン近郊のカピチ島へ上陸してきました。会議後は、同様に予約の必要なリトルバリアー島に、会議で一緒になった北米の研究者たちと上陸してきました。両島とも1日に上陸できる定員がごく少人数に決まっています、外来種のフクロギツネ、その後にはナンヨウネズミ（クマネズミ属）の根絶を達成し、Kaka（カカ）や Kea（ミヤマオウム）など多くの固有種を保護する拠点になっています。ネズミなどはまたすぐに再侵入してしまいますので、かろうじて残された古来の自然を守るために、必死に先鋭的な対策を実施しています。

2010年にオークランドで島嶼の侵略的外来種の会議があったときには、靴底を洗うなど入国時の対策も厳密化され、リトルバリアー島を再訪問したときには、普及啓発活動やボランティアの活動も盛んで、外来種再侵入を阻止するためのモニタリングも見学できました。

私が30年間通っている奄美大島にも国立公園ができ、世界遺産登録の活動が進んでおり、この間に国の侵略的外来種マングースの防除事業が進展するなど、鳥を含めた自然環境の回復が目に見えています。一方で観光客増による一部地域の過密・過剰な利用の弊害も懸念されます。御蔵島は小さい島ですが、日本各地の模範の1つになるように思いました。

(いしだ・けん)



御山山頂から850m下の海が展望できる

(撮影・安部仁美氏)